

深イ～話！

No.131

——「どこまで人を許せるか」(塩見志満子著 のらねこ学かん代表)——

長男が白血病のために小学二年生で亡くなりましたので、四人兄弟姉妹の末っ子の次男が三年生になった時、私たちは「ああ、この子は大丈夫じゃ。お兄ちゃんのように死んだりはしない」と喜んでいました。

ところが、その次男もその年の夏にプールの時間に沈んで亡くなってしまった。

長男が亡くなって八年後の同じ七月でした。

近くの高校に勤めていた私のもとに「はよう来てください」と連絡があって、タクシーで駆けつけたらもう亡くなっていました。

子供たちが集まってきて、「ごめんよ、おばちゃん、ごめんよ」と。

「どうしたんや」と聞いたら十分の休み時間に誰かに背中を押されてコンクリートに頭をぶつけて、沈んでしまったと話してくれました。

母親は馬鹿ですね。「押したのは誰だ。犯人を見つけるまでは、学校も友達も絶対に許さんぞ」という怒りが込み上げてくるんです。

新聞社が来て、テレビ局が来て大騒ぎになった時、同じく高校の教師だった主人が大泣きしながら駆けつけてきました。そして、私を裏の倉庫に連れて行って、こう話したんです。

「これは辛く悲しいことや。だけど見方を変えてみる。犯人を見つけたら、その子の両親はこれから、過ちとはいえ自分の子は友達を殺してしまった、という罪を背負って生きていかないかん。

わしらは死んだ子をいつかは忘れることがあるけん、わしら二人が我慢しようや。

うちの子が心臓麻痺で死んだこと^{まひ}にして、校医の先生に心臓麻痺で死んだという診断書さえ書いてもらうたら、学校も友達も許してやれるやないか。そうしようや。そうしようや」

私はビックリしてしもうて、この人は何を言うんやろうかと。

だけど、主人が何度も強くそう言うものだから、仕方がないと思いました。それで許したんです。

友達も学校も……。

こんな時、男性は強いと思いましたね。

でも、いま考えたらお父さんの言う通りでした。争うてお金をもろうたり、裁判して勝つてそれが何になる……。許してあげてよかったなあと思うのは、命日の七月二日に墓前に花がない年が一年もないんです。三十年も前の話なのに、毎年友達が花を^{たむ}手向けてタワシで墓を磨いてくれている。

もし、私があの時、学校を訴えていたら、お金はもらえてもこんな優しい人を育てることとはできなかった。そういう人が生活する町にはできなかった。心からそう思います。

